

論文

戦前の社会福祉学科における留学生教育

沈 潔（日本女子大学名誉教授）

Pre-war Education of Foreign Students in the Department of Social Welfare

SHEN Jie

要旨: 日本女子大学社会福祉学科は、1921年に「社会事業学部」として創立されて以来、時代の先頭に立ってアジア社会福祉教育の道を開き、留学生教育を牽引してきた。特に日本初の社会事業学部が創設された頃、アジア地域の優秀な女子学生たちの高い関心を集め、海を越えて社会事業学部での勉学を求めた。不完全な統計によると、1921年から1946年頃まで社会事業学部（社会福祉学科の前身）に入学したアジア地域の留学生は約111名だった。

戦前における留学生が社会事業を学ぶ社会的意義は少なくとも以下の2点にあると考えられる。その第一には、特に初期の女子留学生は本国に帰国後、祖国の独立運動や女性運動の先駆者として活躍した事例が少なくなかった。彼女らの努力によって、社会全体としても女性が置かれている状況が見直され、女権意識の目覚めへとつながっていた。

第二に、留学生たちは帰国後、教員、または新聞や雑誌の言論従事者など、多様な分野の専門家として社会に進出し、日本で吸収した社会事業と社会福祉の理念や知見を自国に開花させ、アジア地域全体に広げたと考えられる。

キーワード: 社会事業学部, アジア, 留学生

Key Words: Faculty of Social Work, Asia, International Students

はじめに

日本女子大学社会福祉学科は、1921年に「社会事業学部」として創立されて以来、時代の先頭に立ってアジア社会福祉教育の道を開き、留学生教育を牽引してきた。特に日本初の社会事業学部が創設された頃、アジア地域の優秀な女学生の高い関心を集め、海を越えて社会事業学部での勉学を求めた。不完全な統計によると、1921年か

ら1946年頃まで社会事業学部（社会福祉学科の前身）に入学したアジア地域の留学生は約111名だった。新しい社会事業の理念や知見を吸収し、それを自国に持ち帰って開花させ、新しい知見をアジア地域全体に広げたと考えられる。その激動の時代に本学の社会事業学部は、類例を見ない福祉教育を行った。

1 1921年から1946年までにおける 本学科の留学生の状況

1) 社会事業学部に入學したアジア初の留学生たち

本学では、社会に役立つ教育をめざした成瀬仁蔵の遺志を受け継ぎ、第2代校長の麻生正蔵は日本で初めての社会事業学部を開設し、各方面から注目されていた。

1921年9月27日に社会事業学部が発足したニュースは、『東京朝日新聞』に「社会事業を女性で呼ぶ——米国に倣する」というタイトルで取り上げ、創設式の盛況を報道した。全国から様々な想いと期待を胸に膨らせて、一期生は、児童保全科に42名、女工保全科には23名が参集した¹⁾。アジア初めての社会事業学部であり、女子が社会改良のために働くことを期待して創設された学部なので、留学生にも大変な人気であった。1920年代初頭まで本学の留学生が教育学部（師範家政学部）に集中していたが、社会事業学部が創設されてから、留学生が続々と社会事業学部へ転学、入学した動きがあった²⁾。創設当時の1921年に中国から2名、朝鮮から1名の留学生が入学した。

社会事業学部は創設されて以来、激しい時代の変動に伴い、紆余曲折の道を歩んできた。1933年に実践を重んじる学問としての性質を理由に、社会事業学部だけ修業年限が4年から3年制に短縮された。また、戦局の時勢の影響で社会事業学部の名称は家政学部三類に改称された。この社会事業学部が廃止された背景について、一番ヶ瀬康

子は次のように述べている。「一九二八（昭和三年）の三・一五事件、一九二九年の四・一六事件と左翼運動の高揚とともに、これに対する弾圧抗争も熾烈となっていった。左翼運動や思想問題に対して世人が敏感に反応するようになるとともに、本学部入学生も激減したのであった。このような状況は本学部のみならず、他大学の社会学部、社会事業学部などにも同様の現象がみられたのである。」³⁾但し、社会事業の人材が、社会変化に求められているため、社会事業学部が家政学部三類への名称変更とともに、学生数はいっきに増加した。1931年6名、32年4名の少数入学生から、家政学部三類への移行の33年に18名、34年に41名の学生が入学した。特に三類への移行後、「満洲国」、中華民国からの留学生が増加し、1933年に入学生のうち留学生2名、翌年34年に14名の留学生を受け入れた。1944年に改めて家政学部三類から家政科管理科に、1946年に再び家政科社会福祉学科に名称変更された。

1948年に日本女子大学（新制）設置が認可され、家政学部社会福祉学科と名付けられ、修業年限も3年から4年制に戻った。激動な時代背景の下で試行錯誤を重ね、歩んできた道のりに、社会事業学部を支えてきた人々の中には、留学生たちの姿が終始にいた。

地域別から見るこの時期の本学科の留学生数は、中国からの留学生が37名で最も多く、その次に、旧満州地域（現中国東北地域）からの留学生であり、全学に入学した45名のうち、34名が本学科を選んだ。全学に朝鮮からの留学生が一番多かった167名に対して、社会事業学部への入学生が22名であった。全学に中国から来た留学生74名の半分は本学科に入った。また、全学に植民地だった台湾から57名の留学生のうち、15名が本学科に入学した。ほかには、タイやモンゴル・ベトナムから入学した留学生は3名だった。

20年間余りの期間に、本学科は合計で111名の



出所：社会事業学部創設大会の風景 日本女子大学 HP

留学生を受け入れた。彼女たちがここで受けられた社会福祉の理念と実践のノウハウは、母国に伝えることにより、日本とアジア地域での懸け橋の役割を果たした。また、「アジア初の社会事業学部」というブランド効果も発揮してきた。

2) 中国本土から入学した留学生数の推移と状況

表1に示されたように、中国本土から本学科への入学生は、合計37名であった。日中戦争の戦火においても日本女子大学にあこがれて入学者が絶えなかったことから、日本女子大学の女子教育

は、中国の女子教育に大きな影響を与えたと考えられる。

1921年に社会事業学部に入學した2名のうちの一人である潘寿者(潘白山)は、卒業後、湖南省に戻り、中国での社会教育の開拓に携わっていたことは、最近のデータ調査により分かった。

1921年から1929年まで入学した13人のうち、1924年に入学した車乘驊と呉学謙は、1925年に他大学に転学したとみられ、ほかの11名が、在学年数三年以上となっており、卒業した可能性が高いと思われる。

表1 中国本土から入学した留学生について(合計37名)

名前	入学年齢	入学年・学部名	卒業年/退学年	出身地
黄庸儀 (黄省虞)	21	1921年	1925年	広東省立女子師範卒業
潘寿者 (潘白山)	24	1921年 師範家政学部	1927年 社会事業学部より卒業	湖南省立女子師範卒業
杜黄貞	24	1923年 社会事業	1927年	吉林省女子師範学校卒業
車乘驊	19	1924年 社会事業学部	1924年	江西省 魏秀女子中学班卒業
呉学謙	19	1924年 女工保全科	1925年	安徽省立第二女子師範学校卒業
陳永貞	18	1924年 女工保全科	1926年	北京女子高等師範学校附属中学校卒業
張兆喬	17	1924年 女工保全科・児童保全科	1928年 児童科	広東省 神州女学校卒業
楊趙丕頤	29	1924年 児童保全科	1928年	雲南師範学校卒業
邱毓芳	20	1925年 女工保全科	1929年	奉天女子師範学校卒業
孫惠香	19	1925年 女工保全科	1929年	大連市 同志社女学校普通学部卒業
林雪筠	19	1925年 児童保全科	1928年	広東省 山陽高等女学校卒業
夏朱明之	22	1925年 女工保全科	1933年	湖北省 雲南省立女子師範学校卒業
林景晴	23	1929年 児童保全科	1933年	広東新会縣 広州道根女子師範学校卒業
劉順		1929年 社会事業学部(女工保全科)	1934年	東京市四谷区 大連高等女学校卒業
劉佩清	21	1934年 家政学部第三類	1935年	広東省台山県立中学高級部卒業
黄薔薇	17	1934年 家政学部第三類	1938年	広東女子師範学校卒業
謝福枝	20	1935年 家政学部第三類	1936年	福建省 長崎活水女学校卒
劉葆淑	21	1935年 家政学部第三類	1936年	上海市東亜体育専科学校卒
高文溶	19	1937年 家政学部第三類	1938年	上海中国女子高等中学卒業
楊鳳啣	17	1940年 家政学部第三類	1942年	上海市 上海南方中学高中部卒業
王蘭英	18	1941年 家政学部第三類	1943年	広東省 広州第一女子師範学校卒業
袁晞	18	1941年 家政学部第三類	1942年	中国漢口特区 漢口市市立第一女子中学校卒業
石綺琴	18	1941年 家政学部第三類	1943年	湖北省 漢口聖約瑟女子高級学校卒業
徐應麟	17	1941年 家政学部第三類	1943年	湖北省漢口聖約瑟女子高級学校卒業
石綵琴	17	1941年 家政学部第三類	1943年	湖北省漢口聖約瑟女子高級学校卒
戴琿	16	1941年 家政学部第三類	1944年	上海幼稚師範学校本科卒業
陳宏彬	23	1941年 家政学部第三類	1942年	北京育華女子中学高中部第三年卒業
王蘋	20	1942年 家政学部第三類	1944年	河北省立師範学校卒業
顔迎蓮	18	1942年 家政学部第三類	1945年	大連神明高等女学校
胡蕙芝	20	1943年 家政学部第三類	1946年	河北省通県 女子師範学校卒業
葉寧	19	1943年 家政学部第三類	1945年	北京興亜高級中学校卒業
姚希媛	16	1943年 家政学部第三類	1944年	青島学院絃宇高等女学校卒業

盧蕙蘭	19	1943 家政学部第三類	1945年	中華民国広東省 関東高等女学校卒業
李秀康	18	1943 家政学部第三類	1943年	関東高等女学校卒業
李華玖	16	1943 家政学部第三類	1945年	湖北省 漢口市立第一女子中学校卒業
王麗梅	17	1944 家政科 育児科 管理科	1945年	北京市立第四女子中学校卒業
陣善光	19	1944 家政科 育児科 管理科	1946年	興亜高級中学校

出所：日本女子大学成瀬記念館刊行「附日本女子大学校留学生名簿」『成瀬記念館』2012年NO.27を参考して作成
注：下線を引いた箇所は、日本各地からの入学者を示す。

しかし、1931年9月18日の柳条湖事件（満州事変）の勃発により、中国では局地的ながら戦争状態に入り、中国国内での反日運動が高まりつつあった。1929年から1934年までの間、留学生の新入生はいなくなった。社会事業学部のみではなく、本学全体でも同じ状況であった。もう一つの背景は、この時期に本学全体が一つの転換点を迎えたことに関連すると思われる。1930年に大学本科開校、1931年に家政学部を家政学部第一類、師範家政学部を家政学部第二類、1933年に社会事業学部を廃止、家政学部第三類とした。1934年以後、本土からの留学生が少し入学したが、1939年までの在学者が5名しかいなかった。1940年から敗戦前の1944年までに、留学生が急増し、18名に上った。大学全体の動きから見ても、その時期に中国や満州地域の入学者が急増傾向であった。

戦争状態下における留学生による人的往來の回復の原因について、中国人日本留学史の研究者である実藤恵秀は次のように分析している。第一には、「政治的な原因で、『新興満州国』乗り出そうということよりも、『抗日救国』のためにはまず日本なるものを見極めようという意味がはるかにつよく動いていたからある。第二には、経済的原因で、1935年対日為替相場が大変好転（金貨が下がり、銀貨が上がる）したことも原因している。中国の場合は当時銀本位なので、中国人が日本に留学するのが有利になったのである」⁴⁾と分析している。

また、社会事業学部の入学者の年齢や出身地には、幾つの特徴がある。1940年代以後、本土の入学者は10代後半の者が多く、その以前では20

代前半の人が多かったことと比べて入学生の低年齢化が確認できた。出身地から見ると、とりわけ広東地域から入学した学生がもっと多い9名、それに次ぎ湖北省6名、上海4名、東北地域4人となっている。すでに日本の長崎活水女学校、同志社女学校、山脇高等女学校などに在籍し、日本現地から入学した学生が4名いた。

広東地域から入学した学生が多い理由について、広東省出身の何香凝は1906年に新設された理科教育を中心とした教育学部に入学したことに関連があると思われる。彼女は、来日前から中国で活躍した著名な革命運動家で、帰国後に中国女権運動のリーダーとなり、近代中国美術界でも重要な役割を果たした人物である。彼女の本学への入学は、中国の女性に対する波及効果が大きかったと思う。1907年に同じ広東省出身の楊敢平と康同荷といった2名の中国人留学生が本学の普通予備科に入学し、その後、教育学部に進学した。かつて拙稿の「中国語史料で語る日本女子大学の教育」⁵⁾に記述したように、1924年に中国政府に派遣された広東地域の学生赴日考察団一行は、わざわざ日本政府に指定されなかった視察対象の本学を訪ね、日本婦人平和運動のリーダーである上代タノ先生にインタビューした。本学は広東地域の女子教育に深い関係を持っている。

湖北省からの入学者の多い理由には、この地域がいち早く中国女子教育に取り組んだと知られている。例えば、近代中国における男女共学の最初の公立湖北幼稚園は、この地域で始まった。この幼稚園は構想段階から日本の幼稚園を参照し、日本から教具等を購入するとともに、日本政府を通

じて日本人女性教員を迎えた。先行研究により、明治から昭和期まで活躍された教育者の戸野みちゑは、1902年、母校の東京女子高等師範学校（お茶の水女子大）の教諭に就任、同年9月、夫が清国湖北省武昌の湖北師範学堂・総教習として招かれ、戸野も同地での幼稚園事業の教習として招聘され、1903年秋に戸野、丹雪江、武井ハツら日本人3名が渡清して準備を行い、1904年2月、中国初の公的な男女共学の幼児教育施設「湖北幼稚園」が正式に開園し、戸野が園長に就任した⁶⁾。園長在任期間に同じ敷地で開設する女子教育教員養成の武昌女子師範学堂の創設にも協力した。湖北地域の女子教育に携わった日本人女性は、戸野みちゑのほか、丹雪江、武井ハツら、平野道江がおり、皆ともに東京女子高等師範学校の卒業生であった⁷⁾。日本語教育は、科目として位置づけた。日本の女子教育に共感を持っている地域と言え、本学への入学者が多いことに繋がったと思われる。

3) 満州から入学した留学生数の推移

表2は、満州地域（中国の東北地域）からの入学生の状況である。柳条湖事件（満州事変）前の中国東北地域からの入学生は、中国人留学生として扱われていた。この事件を発端として、日本の関東軍の独断で中国東北地域に傀儡政権である「満洲国」が建てられた。戦乱の影響で中国東北地

域のほとんどの学校が閉校され、教育は全面的に崩壊した。東北大学、馮庸大学、東北交通大学など代表的な大学が東北地域を離れ、関内（中国本土）に移転して開校することもあった。「満洲国」の「新学制」が始まる1937年まで、この地域に大学がない状況が続いていた。こうした背景の下で、大学に進学したい若者は、中国本土に行くか、日本に行くかの選択肢しかなかった。

一方、成立後の「満洲国」政権にとって、崩壊した教育を少しずつ復活し、人材育成に力を注ぐことが急務であった。1932年以後に、男女とも日本への師範学校などの留学が重視され、官費留学制度も整備された。その中、植民地支配における役割が期待された社会教育及び社会事業の重要性が認識されていた。表2に示されたように、満州地域からの社会事業学部の入学者は、1931年の1名から、1933年の3名、1934年の12名、1935年の1名、1936年の3名、1937年の4名、1938年の3名、1940年から1943年までの8名のように毎年、入学者が入っていた。その後、日本の敗戦色が濃くなり、留学生の入学も途切れた。「満洲国」からの入学者が中国本土より増加した要因に、日本留学への誘導政策のほか、この時期の満州地域は国民小学校から中学校まで日本語教育が普及され、流暢な日本語が話せる若者が増え、言葉の障壁がクリアできたことも重要な要因と思われる。

表2 満州地域（中国の東北地域）の留学生について 合計34名

名前	入学年齢	入学年・学部名	卒業年 / 退学年	出身地
孫凌雲	20	1931 国文学部	1936年 社会事業学部卒	満洲国吉林省 吉林省立女子師範学校
劉淑芬	17	1933年家政学部第一類	1937年 家政学部第三類卒	満洲国吉林省立女子中学校卒
李恩華	21	1933 家政学部第三類	1936年	満洲国吉林省 吉林省立女子師範学校卒業
馬鳴鶴	18	1933 家政学部第三類	1936年	奉天省 奉天高等女学校卒業
金安恕	17	1934 家政学部第三類	1937年	満洲国奉天省 北平女子大学高中部卒業
曲淑囁	21	1934 家政学部第三類	1937年	満洲国吉林省 旅順師範学堂
干博敏	18	1934 家政学部第三類	1936年	満洲国奉天瀋陽県 奉天省立女子師範学校卒業
朱若水	22	1934 家政学部第三類	1934年	満洲国吉林省 吉林省立女子中学校卒業
周淑身	22	1934 家政学部第三類	1937年	満洲国吉林省 吉林省扶餘県公立女子師範学校卒業
鄒樹人	17	1934 家政学部第三類	1934年	満洲国奉天省 満洲国奉天女子師範学校卒業

趙書雲	18	1934 家政学部第三類	1936 年	満州国吉林省 寧安女子中学校卒業
趙敏	20	1934 家政学部第三類	1935 年	満州国吉林省 吉林省立女子師範学校卒業
林湘環	18	1934 家政学部第三類	1938 年	満州国吉林省 吉林省立女子中学校卒業
武仲梅	17	1934 家政学部第三類	1937 年	満州国奉天省 奉天省立女子師範学校卒業
劉筠玉	18	1934 家政学部第三類	1935 年	満州国奉天省 奉天女子師範学校卒業
鞠英華	18	1934 家政学部第三類	1938 年	満州国吉林省 北満特区女子第一中学校修了
張春茹	19	1935 家政学部第三類	1938 年	奉天省 奉天女子職業学校卒
張淑貞	19	1936 家政学部第三類	1939 年	満州国濱江省 北満区立第一女子中学校高中文科卒業
右如璽	20	1936 家政学部第三類	1939 年	満州国錦州省 哈爾賓特別区立第一女子中学校高中部卒業
崔蘊英	19	1936 家政学部第三類	1939 年	満州国奉天省 奉天省立女子師範学校卒業
王淑雲	20	1937 家政学部第三類	1940 年	満州国奉天省 奉天省立女子師範学校卒業
馮蓉芬	18	1937 家政学部第三類	1940 年	満州国奉天省 桜蔭高等女学校卒業
都子芳	18	1937 家政学部第三類	1940 年	満州国濱江省 駙安縣西江沿女子兩級中学校卒業
梁國英	19	1937 家政学部第三類	1940 年	満州国濱江省 哈爾濱第一兩級女子中学校卒業
増鍾珉	20	1938 年家政学部 第三類で卒業	1941 年	満州国錦州省 奉天省立女子師範学校卒業
閻慧芳	17	1938 家政学部第三類	1941 年	満州国奉天省 營口縣立女子高級中学校卒業
博丕容	18	1938 家政学部第三類	1941 年	満州国興安南省 奉天省立女子師範学校卒業
邊寶賢	19	1940 家政学部第三類	1942 年	満州国奉天省 濱江省立哈爾濱女子兩級中学校卒業
黄金玉	18	1940 家政学部第三類	1942 年	満州国間島省 記載なし
閻家慧	17	1941 家政学部第三類	1943 年	関東州金州城内 大連神明高等女学校卒業
趙文齡	17	1941 家政学部第三類	1943 年	満州国吉林省 関東高等女学校卒業
張蘊瑛	17	1941 年家政学部第三類・ 国文学部 英文学部	1946 年	満州国奉天省 新京敷島高等女学校卒業
徐純子	17	1942 家政学部第三類・ 国文学部 英文学部	1944 年	関東州大連市 大連弥生高等女学校卒業
張蘊琦	17	1943 家政学部第三類・ 国文学部 英文学部	1946 年	満州国奉天省 新京敷島高等女学校卒業
楊樹媛	19	1943 家政学部第三類・ 国文学部 英文学部	1944 年	満州国奉天省 同志社高等女学校卒業

出所：同表 1

満州地域から社会事業学部に入った留学生のうち、奉天省立女子師範学校の出身者が 8 名いた。奉天省立女子師範学校の前身は、清朝末期に女子教育が認められ、1906 年に官民協力により創設された「奉天省城官立女子師範学堂」であった。1921 年に中学教育が始められたため、奉天省立女子師範学校に改名され、当時の奉天省における唯一の官立女子学校であった。「満洲国」傀儡政権は、国民政府の教育機構をすべて接收・管理することとなり、学校名がそのまま継承された。

奉天は「満鉄」の重要な拠点であることで、奉天省立女子師範学校は、早い時期に日本語教育を導入した。日本女子大学国文科卒業生の服部升子

が⁸⁾、卒業後、服部繁子⁹⁾の仲介で中国に赴き、中国の女子教育に携わることとなった。服部升子が 1905 年から中国の豫教女学堂と淑範女学堂に勤め、日本語、算数等の科目を担当した。1908



服部升子写真

出所：高村光太郎連翹忌運営委員会の blog <http://koyama287.livedoor.blog/archives/1659329.html>

年2月には奉天女子師範学堂へ転任、担当科目は日本語、体操、物理等であった。1914年帰国し、1918年に発足された中華民国留学学生援護機関である日華学会の主事を担当した。中国留日女子学生寮監を務め、「中国人留学生の母」と称されたようである¹⁰⁾。

服部升子が寮監を勤めた日華学会は、1918年5月、「中華民国人にして帝国に來り留学し、又は教育等に関し、研究調査を為さんとする者の為、諸般の便宜を図る」ことを目的に、洪沢栄一や内藤久寛（日本石油の創設者）などの実業家や官僚が設立した団体である。本学に入学した中国留学生が、日華学会の活動に積極的に関わっていた。奉天省立女子師範学校から多くの留学生を本学及び社会事業学部に入學させたことは、懸け橋の役割を果たした服部升子の存在が大きいと考えられる。

一方、20世紀初頭に、中国での女子教育を支援するため、中国に渡った日本女子大学の卒業生も少なくない。例えば、福島県出身の卒業生飯塚貞子は、1906年に27歳で教員として（当時は教習師と呼ばれる）、中国の直隸省（現在の河北省）や四川の公立女学堂に赴任した。長野県出身の卒業生濱田マツは、実践女学校の留学生担当教員を経て、下田歌子の紹介で、中国の広州にある「両広官立女子師範学堂」に赴任した。日本女子大学

家政科卒業の村越信子は、1907年に公使館書記である張元節の仲介で興興女学堂に赴任したなど記録が残されている。また、「満洲国」に管轄されたほかの女子師範学校にも、日本語教育が重視されたため、日本人教員も定期的に派遣し、校長または副校長のどちらか、日本人により担当することが暗黙の原則となっている。

そして、吉林省立女子師範学校から社会事業学部に入學した者が2番目も多く、3名であった。こちらの学校も清末の1908年に女子師範教育提倡という時代背景の下で創設された学校であり、創設当初「官立女子師範学堂」と名付け、師範と保母のクラスからスタートさせた。1911年に蒙養院、1916年に附属小学校を設置し、1927年に高校（中学校相同）1クラスを募集して、学校名も「吉林省立女子師範学校」と改称した。民国期に同校は民国政府の新学制に従い、学費が免除され、男女同等の教育を目指した。1932年に「満洲国」に接収・管理されるようになった。

「満洲国」設立後の女子師範学校の教育には、それまでの民国期と比べれば、表3に示されたような二つの特徴がある。1つ目は、日本語教育が女子教育の主要な内容になり、日本語授業の時間数は全科目で最も多く、週9時間で、次には家政教育の週8時間であったことである。2つ目は、「満

表3 1937年吉林省立女子師範学校の科目及び時間数

課程	公民	教育	国文	日本語	史地	数学	理科	衛生	音楽	書画	家政	体育	農林	計
第一学年	社会生活	心理学、論理学	講読、作文、文法	講読、会話	地理学通論	幾何	生物学		唱歌、楽理	写生画、図案、幾何画、書道	手芸、裁縫、家事	体操、教練、遊戯		
時間数/週	1	2	4	9	2	3	1		2	2	5	3	1	35
第二学年	政治生活	教育学	講読、作文、文字学	講読、会話、文法	世界近世史	代数	日用化学	家庭衛生	同上	写生画、図案、黒板画、書道	手芸、裁縫、刺繍	同上		
時間数/週	1	2	4	7	2	3	2	1	2	2	6	2	1	35
第三学年	経済生活	教育史、教授法、学校管理法	講読、作文、文学史	講読、会話、文法、作文		算術、珠算	物理学	学校衛生	同上	図案、黒板画、書道	手芸、看護、割烹、小学家事教学法	同上		
時間数/週	1	3	4	6		3	2	1	2	2	8	2	1	35

出所：譚娟『満洲国における中国人女子学生の婦女問題観—奉天省立女子師範学校の校友会誌を手がかりに』『中国女性史研究』Vol. No. 25 2016年

洲国」の社会生活，政治生活，経済生活の科目が年次ごと学ばせて国家意識の教育が重視・強調されたことである¹¹⁾。

4) 朝鮮半島から入学した留学生数の推移

朝鮮では，1910年の韓国併合に関する条約により日本の朝鮮支配が本格化した。日本における朝鮮女子留学生の受け入れは，植民地となった1910年以後に始まった。

1910年代に朝鮮から44名の留学生が日本に送られ，東京26名，地方18名にそれぞれ送られた¹²⁾。1920年代になると，女子留学生は急増し，145名に上った¹³⁾。朝鮮女子留学生急増の背景は，1920年代までに専門学校レベルの女子学校は，梨花女子学校のみであったため，高学歴を求めるなら，日本へ留学するのは近道であった。1911年に公布された「朝鮮教育令」では，女子教育が「婦徳を涵養し，国民たる性格を陶冶し，生活に有用な知識と技術を教える」と位置付けられた¹⁴⁾。婦徳を涵養する方針に従って当時，一番人気な専攻分野は，家政学であった。家政学を専攻した女子留学生が全体の約30%を占め，ほかの人気分野は，医学，美術，体育，社会系などであったという。

表4は，1912年～1944年まで日本の大学に留学した朝鮮人女子留学先の概況である(完全な統計ではない)。

朝鮮人女子留学生の中には，裕福な家庭出身の令嬢が多かったが，裕福でない家庭でも留学意識があれば，キリスト教会の支援で留学することも可能となっていた。例えば，キリスト教系校の同志社女子大学が朝鮮女子の留学生に非常に人気で，朝鮮からの留学生が7割以上を占めた。留学生の出身校は，正義女子高等普通学校，梨花高等女学校，貞信女学校，平壤崇義女学校など，キリ

表4 朝鮮出身の女子留学生の在籍した学校と学生数(1912～44年)

学校名	人数	学校名	人数
同志社女子専門学校	60	京都府立女子専門学校	1
京都女子高等専門学校	20	日本女子大学	69
東京女子高等師範学校	53	津田塾専門学校	6
実践女子専門学校	28	東京女子大学	9
東京女子医学専門学校	61	帝国女子医学専門学校	47
日本女子体育専門学校	80	東京女子体育音楽学校	1
日本体育会体操部	1	帝国女子専門学校	83
女子美術学校	107	武蔵野音楽学校	22
東京家政専門学校	9	共立女子専門学校	1
共立女子薬学専門学校	1	東京女子薬学専門学校	1
和洋女子専門学校	1	横浜女子神学校	1
女子経済専門学校	1	日本女子高等商業学校	20
奈良女子高等師範学校	59	大阪女子専門学校	1
梅花女子専門学校	2	大阪音楽学校	6
梅光女学校専門部	1	広島女子専門学校	3
広島保師専修学校	1	ランバス専修学校	4
神戸女子神学校	13	東北帝國大学	3
九州帝國大学	1	計	777

注) 777人は，学校調査と聞き取り調査により把握された人数である。学校調査は，①朝鮮総督府学務局『在内地朝鮮人学生状況』1920年，②朝鮮教育会奨学部『在内地朝鮮学生調』1926，27，28年，③植民地時代に朝鮮で出版された雑誌や新聞などにもとづき，当時，朝鮮人女学生が在籍していたことが確認される45校の専門学校を対象にした。今回，27校の調査を行い，16校については学校当局からの協力を得られず調査ができなかった。残りの2校は，関係資料がないという回答を得た。学校調査は，訪問調査や書面調査で行い，各学校の設立以来1945年までの同窓会名簿，校誌や同窓会誌，学籍簿などを調べ，在籍した朝鮮人女学生の名簿を確認した。そして，可能な範囲で，入学年度，卒業年度(中退者の場合はその年度と理由)，専攻科目，出身地，保証人，家庭環境(親の職業など)，留学直前の学歴，卒業後の事情などを調べた。聞き取り調査は，20校からの64人の卒業生や中退者に対して行った。

出所：朴宣美「朝鮮社会の近代の変容と女子日本留学1909-1945年」『史林』1999年82(4)

スト教系女学校の入学生が目立った¹⁵⁾。

本学に入学した留学生数は、朝鮮出身の人がもっとも多い167人であった。但し、社会事業学部の入学生は少なかった。社会事業学部が創設された1921年に、私立梨花学堂中学科を卒業した金温順が入学したことが始まり、1922年3名、1925年1名、1926年2名の少人数レベルであった。しかし、社会事業学部から家政学部三類に変

更された後、家政という名称が冠したため、朝鮮人の入学生が少し増える傾向であった。朝鮮では家政分野の人气が高かった。入学時期から見ると、1920年代7名、1930年代に9名、1940年代に6名で、そのうちの2名が1945年敗戦後に入学した。表5で示されたとおり、戦前まで本学科は合計で22名の朝鮮人留学生を受け入れた。

表5 朝鮮半島出身の留学生一覧（合計22名）

氏名	入学年齢	入学年・学部	卒業年/退学年	出身地・出身校
金温順	19	1921 社会事業学部	1924年	朝鮮平南江西郡 朝鮮京城私立梨花学堂中学科卒業
崔恩喜	18	1922 社会事業学部	1925	朝鮮黄海道 海州私立懿貞女学校中等科卒業 / 京城官立女子高等普通学校卒業
黄信徳	21	1922 社会事業学部	1926	朝鮮平南平壤府 平壤府私立崇儀女学校（第五学年）卒業 / 私立千代田高等女学校卒業
朴命連 (朴順天)	21	1922 社会事業学部	1926	慶尚南道 釜山府佐川洞私立日新女学校普通科卒業 / 同校高等科卒業
鄭信福	21	1925 社会事業学部（児童保全科）	1926	朝鮮平壤府 平壤私立崇賢女学校卒業
郭花容	23	1926 社会事業学部（女工保全科）	1927	朝鮮京城 京城第一公立高等女学校卒業
李賢卿	18	1926 社会事業学部		朝鮮平城 京城府官立女子高等学校卒業 / 全師範科卒業
卓福守	16	1930 社会事業学部（女工保全科）	1934	朝鮮慶尚南道 淑明高等普通学校
鄭点伊	17	1933 家政学部第三類	1935	朝鮮慶尚南道 朝鮮晋州一新女子高等普通学校卒業卒業
河小蘭	20	1933 家政学部第三類	1934	朝鮮慶南昌寧郡 同徳女子高等普通学校卒業
玉仙	17	1933 家政学部第三類	1934	朝鮮慶尚南道 朝鮮京城培花女子高等普通学校卒業
劉鶴順	25	1934 家政学部第三類	1935	朝鮮黄海道 岩佐高等女学校卒業
李鳳愛	20	1936 家政学部第三類	1939	朝鮮京畿道京城府 同徳女子高等普通学校卒業
黄珪貞	17	1938 家政学部第三類	1941	朝鮮咸鏡南道 咸興公立高等女学校卒業
崔英熙	16	1938 家政学部第三類	1941	朝鮮京畿道 同徳女子高等普通学校卒業
朴竅淳	15	1938 家政学部第三類	1941	朝鮮平安北道 梨花女子高等普通学校卒業
趙福女	18	1940 家政学部第三類	1942	朝鮮平安南道 岩佐高等女学校卒業
李銀熙	16	1940 家政学部第三類	1942	朝鮮平安南道 正義高等女学校卒業
■■■■■	15	1941 家政学部第三類	1943	朝鮮咸鏡南道 咸南公立高等女学校卒業
■■■■■	16	1942 家政学部第三類	1944	朝鮮平壤府 京畿公立高等女学校卒業
■■■■■	16	1946 家政科 児童学科 管理科	1948	朝鮮慶尚北道 千葉県立松尾高等女学校卒業
全金姫	19	1947 家政科 児童学科 社会福祉科	1949	朝鮮慶尚南道 私立松蔭女子商業学校卒業

出所：同表1

注：創氏改名したと思われる日本名については■■■■■で表した。

5) 台湾から入学した留学生数の推移

本学における台湾留学生の受け入れはやや遅れて、1925年に台湾淡水女学院卒業生の呂鏡屏が台湾出身留学生の第1号として家政学部に入學し、1926年に2名が入學した。そのうち、台北第三高等女学校卒業生の林晶晶が進学先として社会事業学部（児童保全科）を選んだ。表6で示さ

れたとおり、戦前まで社会事業学部入學した台湾出身の留学生は合計15名であった。

出身地域別から見ると、台中出身者が6名で最も多く、そして台北4名、台南3名の順位となる。また、年代別で見ると、1920年代の入學者は4名で、1930年代8名、1940年代3名となり、1942年以後、入學者がいなくなった。

表6 台湾からの留学生一覧（合計15名）

氏名	入学年齢	入学年	卒業・退学年	出身地・出身校
林晶晶	18	1926 社会事業学部（児童保全科）	1930	台北市台北市 台北第三高等女学校卒業
林影關	21	1927 社会事業学部（女工保全科）	1928	台湾台中州 台南長老女学校卒業
甘寶叙	20	1927 社会事業学部（女工保全科）	1928	台湾台中州 彰化女子高等普通女学校卒業
劉氏瓊瑛	20	1927 社会事業学部（女工保全科）	1929	台湾台中州 上野高等女学校卒業
徐氏朗玉	21	1931 社会事業学部	1932	台南州嘉義市 州立台北第三高等女学校
林氏淑媛	18	1934 家政学部第三類	1934	台湾高雄州 岩佐高等女学校卒業
郭氏玉直	17	1934 第三類郭氏玉直	1937	台北市 台北州立第三高等女学校卒業
林氏採瑾	17	1936 家政学部第三類	1939	台湾台中州 堀越高等女学校卒業
王氏彩雲	18	1937 家政学部第三類	1940	台湾台南州 州立台南第二高等女学校卒業
高久鴛鴦	16	1938 家政学部第三類	1941	台湾台中州 台中州立彰化高等女学校卒業
涂氏玉英	17	1938 家政学部第三類	1941	台湾新竹州 高雄州立屏東高等女学校卒業
李氏珊瑚	17	1938 家政学部第三類	1941	台湾台北市 州立台北第三高等女学校卒業
邱氏玉燕	17	1941 家政学部第三類	1943	台湾台中州 台中州立彰化高等女学校卒業
林氏苑玉	18	1941 家政学部第三類	1941	台湾新竹州 台北州立台北第三高等女学校卒業
張氏靈靈	19	1942 家政学部第三類	1945	台湾台南州 鷗友学園高等女学校卒業

出所：同表1

そのほか、表7に示されたように、モンゴル、タイ、ベトナムなどアジアほかの地域から入學した留学生はそれぞれ1名だった。三人とも敗戦直

前の1944年に入學し、1945年の敗戦後に卒業できず、退學したとみられる。

表7 アジアほかの地域から入學した留学生一覧（合計3名）

	入学年齢	入学年、学科	退學・卒業年	出身地、出身校
丁瑞蘭	21	1944 家政科 育児科 管理科	1945年	蒙疆張家口市 北京市立第四女子中学校 / 蒙口市善隣回民女塾師範部卒業
チュムシンナナコーン	17	1944 家政科 育児科 管理科	1945年	泰国バンコック 国際学友会日本語学校修了
ファンティリー	21	1944 家政科 育児科 管理科	1945年	安南ハノイ・ルシャ ルボン 仏印ハノイ女学校

出所：同表1

激動の歴史の中で翻弄されたにも拘わらず、社会事業学部が創設されてから敗戦までの二十数年間、社会事業と社会福祉に関する知見と教養の習得を目指し、アジア地域から111名の留学生が本学科に入学した。社会的需要から考えれば決して十分とは言えないが、社会福祉国際教育のパイオニアとして、これだけの人材をアジア諸国や地域に送り出したことも本学科の歴史の重要な1ページであった。

2 学部別から見る社会事業学部の留学生の状況

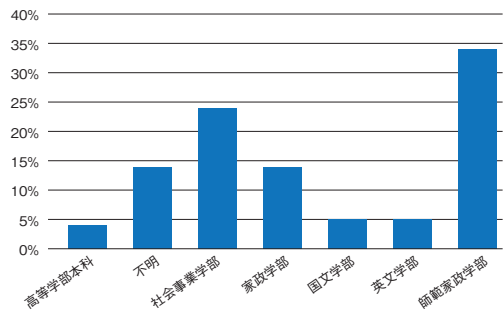
日本女子大学の創設から日本敗戦までの間、本学の学部別に入学した留学生の総数は、聴講生などを除いて、348名であった。敗戦までに本学は、家政学部、国文学部、英文学部、師範学部、社会事業学部という構造で時流に乗って歩んできた。そのうち、社会事業学部の留学生は、どのような実態だったのか。成瀬記念館の調査報告のデータ¹⁶⁾を活用しながら、見ていきたい。

図1は、旧制時代の学部別留学生の割合を示すものである。1901年から1946年までの間に、留学生の学部別の分布は、師範家政学部が最上位で総数の34%を占め、その次に社会事業学部であり、24%を占めた。そのほか、家政学部14%、国文学部5%、英文学部5%、高等学部本科4%、不明14%、となっていた。

20世紀に入ってから、日本をはじめとした東アジア地域での女子教育は盛んになり、日本の植民地とされた朝鮮、台湾、満州地域及び中国本土において、女子教育の教員養成が急務となった。その背景の下で、師範家政学部の入学生は多くなったのである。

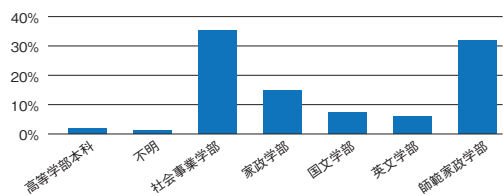
図2は、卒業生の学部別割合を示すものである。戦前のような不安定な時代の中に、入学した留学生が家庭事情や政治情勢の変化及び結婚などの理由で、学業を中断せざるを得ない事情が多

図1 旧制時代日本女子大学の学部別入学留学生の割合



出所：日本女子大学成瀬記念館 大門泰子『調査報告「旧制時代における本学への留学生」成瀬記念館 2012年NO27 pp55 資料より作成

図2 卒業生学部別の割合



出所：同図1、56頁。

かった。348名の入学生のうち、卒業できたのは半分程度の172名しかいなかった。この割合は日本人学生の卒業率と大差がなかった。卒業生学部別割合の図2データに示されたように、社会事業学部の卒業率が36%を占めて一番高く、師範家政学部34%、家政学部15%、国文学や英文学部がそれぞれ6%となっていた。また、高等学部本科が2%で、不明者が1%であった。

卒業生の出身学部を国ごとに分けてみれば、次のような実態が浮かんでくる。

1) 中国出身の留学生について

中国本土から入学した留学生のうち、35名が卒業した。出身学部の卒業率を見ていくと、社会事業学部48%で最も多く、その次には師範家政学部となり37%で、家政学部や国文学がそれ

ぞれ6%に、英文学部の卒業者がゼロであった。

1920年まで中国人留学生は教育学部・師範家政学部への入学者が大半だったが、社会事業学部が設置されてから、ほとんどが同学部へ入学した。辛亥革命直後のこの時期に、中国人女子留学生は「革命救国」という目的を持って、師範教育よりも現実社会に対する学習と適応を重視する傾向が現れた。「日本を通じて、西洋の新女性観、新社会制度を学ぼう」といった視点で「積極的に様々な実践活動を行なった」と評価されている。¹⁷⁾

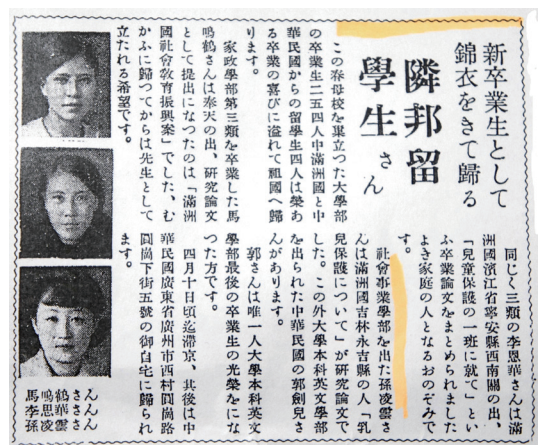
2) 満州地域出身の留学生について

満州地域の留学生が、社会事業学部を希望する者が人数的に圧倒的なものだけではなく、学業を卒業するまで努力する学生も多かった。満州地域の留学生の卒業率を見ても、卒業者30人のうち、社会事業学部が24名に、全体の80%を占めていた。ほかには、師範家政学部が17%で、国文学部と英文学部がゼロで、不明が3%であった。社会事業学部を目指した入学生の目的は、植民地・傀儡政権下にある貧困な社会や劣悪な労働問題と直に結びつき、進学希望者の学部選定につながったことは容易に想像できる。また社会事業学部の修業年限が他の学部よりも一年短い三年制であったということも重要な要因と思われる。

日本女子大学の同窓会組織の桜楓会が刊行する『家庭週報』に満州地域出身の留学生に関連する記事を取り上げてみよう。『家庭週報』1340号(昭和11年3月23日)に(図3)、「新卒業生として錦衣をきて帰る：隣邦留学生さん」を題した記事に、社会事業学部卒の孫凌雲、李恩華、馬鳴鶴3名の留学生の写真付きで取り上げられた。また、「この春母校を巣立った大学部の卒業生254人中満州国と中華民国からの留学生四人は栄ある卒業の喜びにあふれて祖国へ帰ります。家政学部三類を卒業した馬鳴鶴さんは奉天の出、研究論文として提出になったのは、「満州国社会教育振興案」だっ

た。「むかふに帰ってからは、先生として立たれる希望」です。同じ三類の李恩華さんは満州国濱江省寧安県西南関の出、「児童保護一班について」という卒論をまとめられた。「よき家庭の人となるお望み」です。社会事業学部に出た孫凌雲さんは、満州国吉林省永吉県の人「乳児保護についてが研究論文でした」という内容の記載があった。この3名を通して満州地域出身の留学生の留学生生活の一斑を窺える。

図3 「新卒業生として衣錦をきて帰る：隣邦留学生さん」



出所：「家庭週報」昭和17年3月23日1340号

3) 朝鮮地域出身の留学生について

朝鮮出身の留学生の場合は、卒業者74名のうち、師範家政学部が一番多く、46%を占め、社会事業学部が18%で、家政学部18%、英文学部9%、国文学部7%、高等学部や不明者がそれぞれ1%となる。当時の朝鮮地域では、社会進出したい女性の一番望んでいる職業が教員であった。日本での家政科教育の重み及び家庭生活の改良への関心は、師範家政学部の選択につながったとみられる。

4) 台湾地域出身の留学生について

台湾出身の留学生の場合は、卒業した31名

のうち、社会事業学部が23%を占め、家政学部32%に、師範家政学部19%に、国文学部13%、英文学部10%など、バランスがよく分散していたように見える。

以上のように社会事業学部の留学生は、全学留学生のうちの入学率にしても、卒業率にしても、いずれもトップレベルに位置していることがわかる。

終わりに 本学科のアジア留学生教育の意味

戦前における留学生が社会事業を学ぶ社会的意義及び本学科の国際教育の意味などについて、関連する情報や資料は発掘されていなかったため、全面的な概説と具体的な人物や事項に対する解説を行うことは至難の作業である。しかし、一般論としていえば、その意味は少なくとも以下の3点にあると考えられる。

その第一には、特に初期の女子留学生は帰国後、祖国の独立運動や女性運動の先駆者として活躍した事例が少なくなかった。すでに触れた本学第一号留学生の何香凝は、帰国後に中国女権運動のリーダーとして、周辺に集う女性たちを啓蒙し、男女同権や女性の社会進出などの新しい思想と理念を伝播する役割を果たした。1922年に社会事業学部に入學し、1926年に卒業した朝鮮人留学生の黄信徳は、在学中にも女性労働運動や労働運動論を研究し、帰国後に「中央女子青年同盟」を結成、翌年には女性統一戦線組織である「権友会」のリーダーとなった。このような人たちの努力によって、社会全体としても女性が置かれている状況を見直し、女権意識の目覚めへとつながっていったのである。

第二に、留学生たちは帰国後、教員、新聞や雑誌の言論従事者、芸術家など、多様な分野の専門家として社会に進出していった。例えば、1921年に社会事業学部に入學し、1927年に卒業した

潘寿者は、帰国して間もない1930年に、青島市の民教館館長を務め、民衆の啓蒙教育や社会教育の責務を担っていた。そして、1929年に社会事業学部女工保全科に入學し、1934年に卒業した劉順は、帰国後に満州国ハルビン市庁勤務となった。

第三に、日本女子大学社会事業学部への留学を通し、日本の女子教育を自国に広げ、女子教育の意義を理解する人たちを育ち、両国間の懸け橋を担っていたことである。成瀬仁蔵の『女子教育論』や青鞜雑誌の理念などは、早い時期にも中国や朝鮮、台湾に伝播し、その地域の女性解放運動に大きな励みとなった。その功績には本学科の卒業生の存在意味が非常に大きいと思われる。

*本研究は科研費「日中間の社会事業政策移転のメカニズムに関する研究：1920～40年代を中心に」（令和2年～5年度課題番号19K02224 研究代表者 沈潔）の助成を受けたものである

註

- 1) 日本女子大学 HP 2023年9月25日アクセス
- 2) 大門泰子「旧制時代における本学への留学生」『成瀬記念館』2012年NO.27頁
- 3) 日本女子大学社会福祉学科80年史編纂委員会『日本女子大学社会福祉学科80年史』54-55頁。
- 4) 実藤恵秀『中国人日本留学史』、くろしお出版、1960年、130頁。
- 5) 沈潔『社会福祉』第61号、日本女子大学2020年。
- 6) 権明愛/上垣内伸子「戸野みちゑと中国初期の幼稚園教育」『十文字学園女子大学人間生活学部紀要』32-35p、2011-12-20
- 7) 孫長亮「清末中国における女子教育近代化過程の一断面—日本女性教習の活動及びその特色を中心に—」岡山大学大学院社会文化科学研究科『文

化共生学研究』第 17 号 2018.3 p127, p137

- 8) 日本女子大学卒業生の日本の洋画家、紙絵作家高村智恵子の恩師ともいわれている。
- 9) 服部繁子は、著名な漢学者島田篁村の娘であり、中国哲学研究の先駆者である服部宇之吉の妻である。また、服部繁子が執筆した『家政学』は、中国女子教育に大きな影響力を与えた。
- 10) 孫長亮「清末中国における女子教育近代化過程の一断面—日本女性教習の活動及びその特色を中心に—」岡山大学大学院社会文化科学研究科『文化共生学研究』第 17 号 2018 年（2018.3）を参考。
- 11) 譚娟『満州国における中国人女子学生の婦女問題観—奉天省立女子師範学校の校友会誌を手がかりに』を参照。
- 12) 崔恵隣「植民地近代女性の主体と民族意識——朝鮮人女子留学生と「女子界」を中心に——」を参照。
- 13) 朴宣美「朝鮮社会の近代的変容と女子日本留学 1909-1945 年」『史林』1999 年 82（4）。
- 14) 朝鮮総督府印刷局「第一次朝鮮教育令第 15 条『朝鮮総督府官報』号外』明治 44 年 10 月 20 日
- 15) 太田孝子「植民地下朝鮮からの女子内地留学生（IV）」岐阜大学留学生センター紀要 2013 を参照。
- 16) 大門泰子「旧制時代における本学への留学生」『成瀬記念館』2012 年 NO27 を参照。
- 17) 大門泰子『調査報告「旧制時代における本学への留学生」』成瀬記念館』2012 年 NO27 を参照。